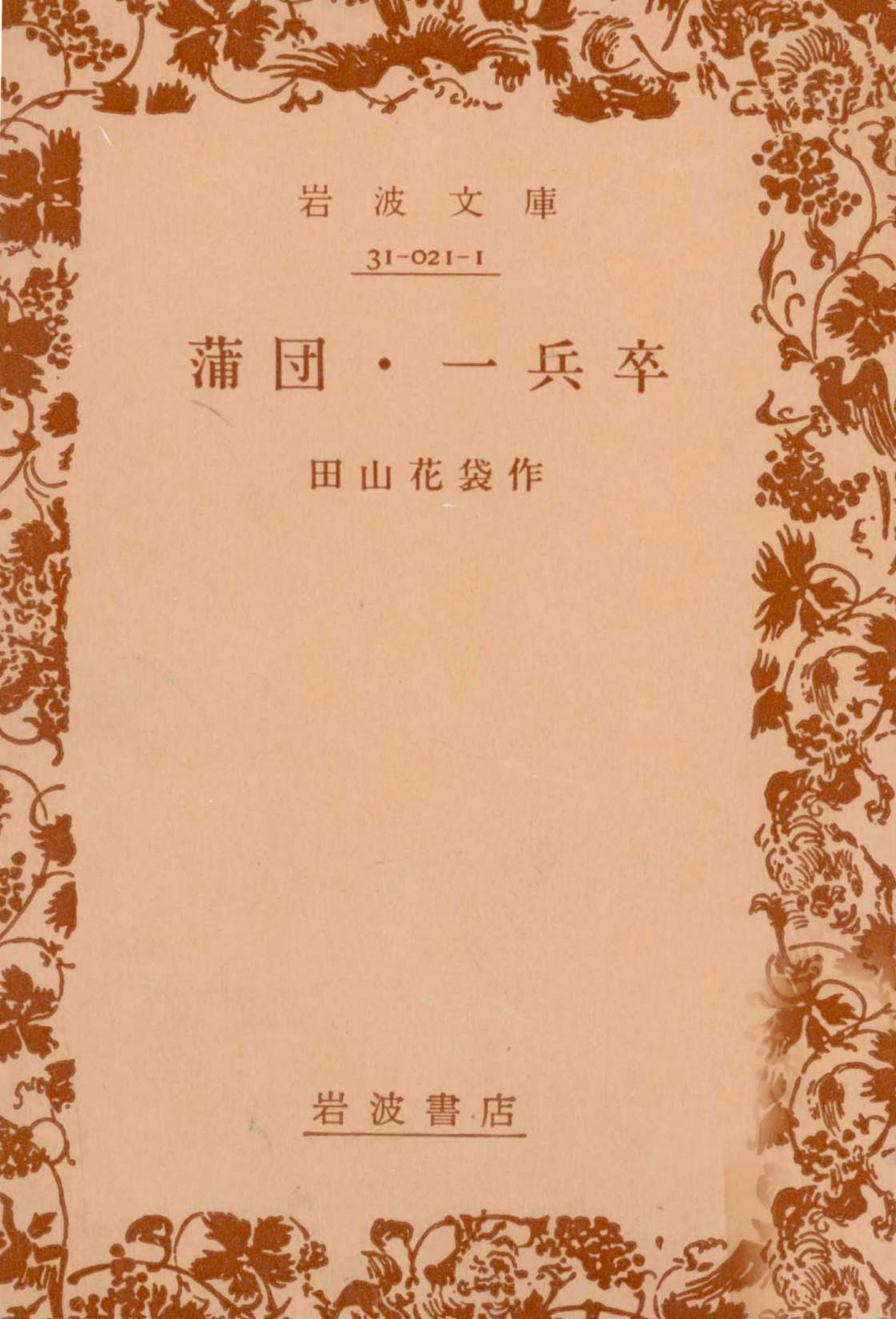




岩波文庫

31-021-1

蒲団・一兵卒

田山花袋作

岩波書店

蒲団・一兵卒

1930年7月15日 第1刷発行
1972年12月16日 第43刷改版発行 ©
1979年12月10日 第50刷発行

¥ 150

作 者 た やま か たい
 田 山 花 袋

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

岩 波 文 庫

31-021-1

蒲 団 ・ 一 兵 卒

田 山 花 袋 作

岩 波 書 店

目次

蒲 団 五

一 兵 卒 八五

解 題 前 田 晁 一〇七

解 説 相 馬 庸 郎 二二

蒲^ハ

団^{どん}

一

小石川の切支丹坂から極楽水に出る道のだらだら坂を下りようとしてかれは考えた。「これ自分と彼女との関係は一段落を告げた。三十六にもなって、子供も三人あって、あんなことを考えたかと思うと、ばかばかしくなる。けれど……けれど……本当にこれが事実だろうか。あれだけの愛情を自身に注いだのは単に愛情としてのみで、恋ではなかったらうか。」

数多い感情ずくめの手紙——二人の関係はどうしても尋常ではなかった。妻があり、子があり、世間があり、師弟の関係があればこそあえてはげしい恋に落ちなかったが、語り合う胸のとどろき、相見る目の光、その底には確かにすさまじい暴風が潜んでいたのである。機会に遭遇しさえすれば、その底の底の暴風はたちまち勢いを得て、妻子も世間も道徳も師弟の関係も一挙にして破れてしまうであろうと思われた。少なくとも男はそう信じていた。それであるのに、二三日來のこの出来事、これから考えると、女は確かにその感情を偽り売ったのだ。自分を欺いたのだと男は幾度も思った。けれど文学者だけに、この男は自ら自分の心理を客観するだけの余裕をもっていた。年若い女の心理は容易に判断し得られるものではない、かの温かいうれしい愛情は、単に女性特有の自然の發展で、美しく見えた目の表情も、やさしく感じられた態度もすべて無意識

で、無意味で、自然の花が見る人に一種の慰藉を与えたようなものかもしれない。一步を譲って女は自分を愛して恋していたとしても、自分は師、かの女は門弟、自分は妻あり子ある身、かの女は妙齡の美しい花、そこに互いに意識の加わるのをいかんともすることはできまい。いや、さらに一步を進めて、あの熱烈なる一封の手紙、陰に陽にその胸のもたえを訴えて、ちょうど自然の力がこの身を圧迫するかのよう、最後の情を伝えて来た時、その謎をこの身が解いてやらなかった。女性のつつましかな性として、その上になお露わに迫って来ることがどうしてできよう。そういう心理からかの女は失望して、今回のような事を起こしたのかもしれない。

「とにかく時機は過ぎ去った。彼女はすでに他人の所有だ！」

歩きながらかれはこう絶叫して頭髪をむしった。

縞セルの背広に、麦稈帽、藤蔓の杖をついて、やや前のめりにだらだらと坂を下りて行く。時は九月の中旬、残暑はまだ堪え難く暑いが、空にはすでに清涼の秋氣が充ち渡って、深い碧の色が際立って人の感情を動かした。肴屋、酒屋、雑貨店、その向こうに寺の門やら裏店の長屋やらが連なって、久堅町の低い地には数多の工場の煙筒が黒い煙をみなぎらしていた。

その数多い工場の一つ、西洋風の二階の一室、それがかれの毎日正午から通うところで、十畳敷きほどの広さの室の中央には、大きい一脚のテーブルが据えてあって、傍らに高い西洋風の本箱、この中にはすべて種々の地理書が一杯入れられてある。かれはある書籍会社の囑託を受けて地理書の編集の手伝いに従っているのである。文学者に地理書の編集！かれは自分が地理の趣味をもっているからと称して進んでこれに従事しているが、内心これに甘んじておらぬことは言

うまでもない。後れがちなる文学上の閱歴、断編のみを作つて未だに全力の試みをする機会に遭遇せぬ煩悶、青年雑誌から月ごとに受ける罵評の苦痛、かれ自らはその他日成すあるべきを意識してはおるものの、中心これを苦に病まぬ訳には行かなかつた。社会は日増しに進歩する。電車は東京市の交通を一変させた。女学生は勢力になって、もう自分が恋をしたころのような旧式の娘は見たくも見られなくなった。青年はまた青年で、恋を説くにも、文学を談ずるにも、政治を語るにも、その態度がすべて一変して、自分らとは永久に相触れることができないように感じられた。

で、毎日機械のように同じ道を通つて、同じ大きい門を入つて、輪転機関の屋を撼す音と職工の臭い汗との交つた細い間を通つて、事務室の人々に軽く挨拶して、こつこつと長い狭い階梯を登つて、さてその室に入るのだが、東と南に明いたこの室は、午後のはげしい日影を受けて、実に堪え難く暑い。それに小僧が無精で掃除をせぬので、テーブルの上には白い埃がざらざらと心地悪い。かれは椅子に腰を掛けて、煙草を一服吸つて、立ち上がつて、厚い統計書と地図と案内記と地理書とを本箱から出して、さて静かに昨日の続きの筆を執り始めた。けれど二三日来、頭脳がむしゃくしゃしているの、筆が容易に進まない。一行書いては筆を留めてその事を思う。また一行書く、また留める、また書いてはまた留めるというふう。そしてその間に頭脳に浮かんで来る考えはすべて断片的で、猛烈で、急激で、絶望的の分子が多い。ふとどういふ連想か、ハプトマンの「寂しき人々」を思い出した。こうならぬ前に、この戯曲をかの女の日課として教えてやろうかと思つたことがあつた。ヨハンネス・フォケラートの心事と悲哀とを教えてやりた

かった。この戯曲ドラマをかれが読んだのは今から三年以前、まだかの女じよのこの世にあることをも夢にも知らなかったところであったが、そのころからかれはさびしい人であった。あえてヨハンネスにその身を比そうとはしなかったが、アンナのような女がもしあったなら、そういう悲劇トラジディに陥るのは当然だとしみじみ同情した。今はそのヨハンネスにさえなれぬ身だと思って長嘆した。

さすがに「寂しき人々」をかの女じよに教えなかったが、ツルゲネーフの「ファースト」という短編を教えたことがあった。ランプの光明らかなる四畳半の書齋、かの女じよの若々しい心は色彩ある恋物語にあこがれ渡って、表情ある目はさらに深い深い意味をもって輝きわたった。ハイカラな底髪ひしがみ、櫛くし、リボン、ランプの光線がその半身を照らして、一卷の書籍に顔を近く寄せると、言うに言われぬ香水のかおり、肉のかおり、女のかおり——書中の主人公が昔の恋人に「ファースト」を読んで聞かせる段を講釈する時には男の声もはげしく戦ふるえた。

「けれど、もうだめだ！」

と、かれは再び頭髪かみをむしった。

二

かれは名を竹中時雄たけなかときおといった。

今より三年前まへ、三人目の子が細君の腹にできて、新婚の快樂などはとうに覚め尽くしたところであった。世の中の忙しい事業も意味がなく、一生作ライフワークに力を尽くす勇氣もなく、日常の生活——朝起きて、出勤して、午後四時に帰って来て、同じように細君の顔を見て、飯を食って眠るという

単調なる生活につくづくあき果ててしまった。家を引っ越し歩いてもおもしろくない、友人と語り合ってもおもしろくない、外国小説を読みあさっても満足ができぬ。いや、庭樹の繁り、雨の点滴、花の開落などという自然の状態さえ、平凡なる生活をしてさらに平凡ならしめるような気がして、身を置くところはないほどさびしかった。道を歩いて常に見る若い美しい女、できるならば新しい恋をしたいと痛切に思った。

三十四五、實際このころにはだれにでもある煩悶で、この年ごろに賤しい女に戯るるもの多いのも、畢竟そのさびしさを医すためである。世間に妻を離縁するものもこの年ごろに多い。

出勤する途上に、毎朝邂逅う美しい女教師があった。かれはそのころこの女にあうのをその日の唯一の楽しみとして、その女についていろいろな空想をたくましくした。恋が成り立って、神楽坂あたりの小待合に連れて行って、人目を忍んで楽しんだらどう……。細君に知れずに、二人近郊を散歩したらどう……。いや、それどころではない、その時、細君が懐妊しておったから、ふと難産して死ぬ、その後その女を入れるとしてどうであらう。……平気で後妻に入れることができるだろうかなどと考えて歩いた。

神戸の女学院の生徒で、生まれは備中の新見町で、かれの著作の崇拜者で、名を横山芳子という女から崇拜の情をもって充たされた一通の手紙を受け取ったのはそのころであった。竹中古城といえ、美文的小説を書いて、多少世間に聞こえておったので、地方から来る崇拜者渴仰者の手紙はこれまでも随分多かった。やれ文章を直してくれの、弟子にしてくれのと一々取り合っではおられなかった。だからその女の手紙を受け取っても、別に返事を出そうとまでその好奇心

は募らなかつた。けれど同じ人の熱心なる手紙を三通までもらつては、さすがの時雄も注意をせずにはおられなかつた。年は十九だそうだが、手紙の文句から推して、その表情の巧みなのは驚くべきほどで、いかなることがあつても先生の門下生になつて、一生文学に従事したいとの切なる願望^{のぞみ}。文字は走り書きのすらすらしした字で、よほどハイカラの女らしい。返事を書いたのは、例の工場の二階の室で、その日は毎日の課業の地理を二枚書いてよして、長い数尺^{せき}に余る手紙を芳子に送つた。その手紙には女の身として文学に携わることの不心得、女は生理的に母たるの義務を尽くさなければならぬ理由、処女にして文学者たるの危険などを縷々^{るる}として説いて、幾らか罵倒^{ばとう}的の文辞^{もんじ}をも陳^たべて、これならもう愛想^{あいそ}をつかしてあきらめてしまふであろうと時雄は思つて微笑した。そして本箱の中から岡山県の地図を捜して、阿哲^{あてつ}郡新見町の所在を研究した。山陽線から高梁^{たかはし}川の谷をさかのぼつて奥十数里、こんな山の中にもこんなハイカラの女があるかと思ふと、それでも何となくなつたしく、時雄はその付近の地形やら山やら川やらを子細に見た。

で、これで返辞をよこすまいと思つたら、それどころか、四日目にはさらに厚い封書が届いて、紫インキで、青い罫^{けい}の入^{はい}つた西洋紙に横に細字^{さいじ}で三枚、どうか将来見捨てずに弟子^{でし}にしてくれという意味が返すがえすも書いてあつて、父母^{ちちはは}に願つて許可を得たならば、東京に出て、しかるべき学校に入つて、完全に忠実に文学を学んで見たいとのことであつた。時雄は女の志に感ぜずにはおられなかつた。東京でさえ——女学校を卒業したものでさえ、文学の価値^{ねち}などはわからぬものなのに、何もかもよく知っているらしい手紙の文句、早速返事を出して師弟の関係を結んだ。それからたびたびの手紙と文章、文章はまだ幼稚な点はあるが、癖のない、すらすらしした、将

来発達の見込みは十分にあると時雄は思った。で一度は一度よりだんだん互いの気質が知れて、時雄はその手紙の来るのを待つようになった。ある時などは写真を送れと言ってやろうと思って、手紙のすみに小さく書いて、そしてまたこれを黒々と塗ってしまった。女性には容色きりようというものがぜひ必要である。容色のわるい女はいくら才があっても男が相手にしない。時雄も内々胸むねの中で、どうせ文学をやろうというような女だから、不容色に相違ないと思った。けれどなるべくは見られるくらいちよほの女であって欲しいと思った。

芳子が父母ちちははに許可ゆるしを得て、父につれられて、時雄の門を訪うたのは翌年の二月で、ちょうど時雄の三番目の男の児この生まれた七夜やの日であった。座敷の隣の室は細君の産褥さんじよくで、細君は手伝いにきている姉から若い女門下生でしの美しい容色きりようであることを聞いて少なからず懊惱おうのうした。姉もあいう若い美しい女を弟子にしてどうする気だろうと心配した。時雄は芳子と父とを並べて、纒々るるとして文学者の境遇と目的とを語り、女の結婚問題について予め父親の説をたたいた。芳子の家は新見町でも第三とは下らぬ豪家で、父も母も厳格なる基督教クリスチヤン信者、母はことにすぐれた信者で、かつては同志社女学校に学んだこともあるという。総領の兄は英国イギリスへ洋行して、帰朝後は某官立学校の教授となっている。芳子は町の小学校を卒業するとすぐ、神戸に出て神戸の女学院に入り、そこでハイカラな女学校生活を送った。キリスト教の女学校は他の女学校に比して文学に対してすべて自由だ。そのところこそ「魔風恋風」や「金色夜叉こんじきや」などを読んでではならんとの規定も出ていたが、文部省で干渉しない以前は、教場でさえなくば何を読んでも差しつかえなかった。学校に付属した教会、そこで祈禱きとうの尊とうといこと、クリスマスの晩のおもしろいこと、理想を養うという

ことの味をも知って、人間の卑しいことを隠して美しいことを標榜するという群れの仲間となつた。母の膝下しつかが恋しいとか、故郷ふるさとが懐かしいとか言うことは、来た当座こそ切実に辛く感じもしたが、やがては全く忘れて、女学生の寄宿生活をこの上なくおもしろく思うようになった。おいしい南瓜とうなすを食べさせないといつては、お鉢はちの飯に醬油しょうゆをかけて賄方まかないをいじめたり、舎監のひねくれた老婦の顔色を見て、陰陽かげひなたに物を言ったりする女学生の群れの中に入っているのは、家庭に養われた少女おとめのように、單純に物を見ることがどうしてできよう。美しいこと、理想を養うこと、虚栄心ヴァニチーの高いこと——こういう傾向をいつとなしに受けて、芳子は明治の女学生の長所と短所とを遺憾なく備えていた。

少なくとも時雄の孤独なる生活はこれによって破られた。昔の恋人——今の細君。かつては恋人には相違なかったが、今は時勢が移り変わった。四五年來の女子教育の勃興ぼっこう、女子大学の設立、底髪ひさし、海老茶袴えびちやばかま、男と並んで歩くのをはにかむようなものは一人もなくなった。この世の中に、旧式の丸鬢まるまげ、泥鴨どろがものような歩き振り、温順と貞節とよりほかに何物をも有せぬ細君に甘んじていることは時雄には何よりも情けなかった。路みちを行けば、美しい今様の細君を連れてのむつまじい散歩、友を訪とえば夫の席に出て流暢りゅうちやうに会話をにぎやかす若い細君、ましてその身が骨を折って書いた小説を読もうでもなく、夫の苦悶くもん煩悶はんもんには全く風馬牛ふうばうで、子供さえ満足に育てればいいという自分の細君に対すると、どうしても孤独ロソリーネスを叫ばざるを得なかった。「寂しき人々」のヨハネスと共に、家妻かさいというものの無意味を感じずにはおられなかった。これが——この孤独ロソリーネスが芳子によって破られた。ハイカラな新式な美しい女門下生が、先生！ 先生！ と世にもえらい人

のように渴仰^{かつぎやう}して来るのに胸を動かさずにだれがおられようか。

最初の一月ほどは時雄の家に仮寓^{かぐう}していた。華やかな声、艶やかな姿、今までの孤独なさびしいかれの生活に、何らの対照！ 産褥^{さんじよく}から出たばかりの細君を助けて、靴下^{くつした}を編む、襟巻^{えりまき}を編む、着物を縫う、子供を遊ばせるといふ生き生きした態度、時雄は新婚当座に再び帰ったような気がして、家門近く来るとそそるように胸が動いた。門をあけると、玄関にはその美しい笑顔、色彩に富んだ姿、夜も今までは子供と共に細君がいぎたなく眠ってしまったて、六畳の室にいたずらに明らかなランプも、かえってわびしさを増すの種であったが、今はいかに夜更^{よふか}けて帰って来ても、ランプの下には白い手が巧みに編み物の針を動かして、膝^{ひざ}の上に色ある毛糸の丸い玉！ にぎやかな笑い声が牛込^{うしごめ}の奥の小柴垣^{こしばがき}の中に充ちた。

けれど一月ならずして時雄はこの愛すべき女弟子をその家に置く事の不可能なのを覺^さった。従順なる家妻はあえてその事に不服をも唱えず、それらしい様子も見せなかったが、しかもその気色^{しよく}は次第に悪くなった。限りなき笑い声の中に限りなき不安の情が充ち渡った。妻の里方^{しんせき}の親戚間などには現に一問題として講究されつつあることを知った。

時雄は種々に煩悶^{はんもん}した後、細君の姉の家——軍人の未亡人で恩給と裁縫とで暮らしている姉の家に寄寓^{きぐう}させて、そこから麴町^{こうじまち}の某女塾^{じょじゆく}に通学させることにした。

三

それから今回の事件まで一年半の年月^{としつき}が経過した。

その間二度芳子は故郷を省した。短編小説を五種、長編小説を一種、その他美文、新体詩を数十編作った。某女塾では英語は優等のできて、時雄の選択で、ツルゲネーフの全集を丸善から買った。初めは、暑中休暇に帰省、二度目は、神経衰弱で、時々癪のような痙攣を起こすので、しばし故山の静かなところに帰って休養する方がいいという医師の勧めに従ったのである。

その寓していた家は麴町の土手三番町、甲武の電車の通る土手際で、芳子の書斎はその家での客座敷、八畳の間、前に往来の頻繁な道路があつて、がやがやと往来の人やら子供やらでやかましい。時雄の書斎にある西洋本箱を小さくしたような本箱が一閑張の机のそばにあつて、その上には鏡と、紅皿と、白粉のびんと、今一つシェウソカリの入った大きなびんがある。これは神經過敏で、頭脳が痛くって仕方がない時に飲むのだという。本箱には紅葉全集、近松世話浄瑠璃、英語の教科書、ことに新しく買ったツルゲネーフ全集が際立って目に付く。で、未来の閨秀作家は学校から帰って来ると、机に向かつて文を書くというよりは、むしろ多く手紙を書くので、男の友達も随分多い。男文字の手紙も随分来る。中にも高等師範の学生に一人、早稲田大学の学生に一人、それが時々遊びに来たことがあつたそうだ。

麴町土手三番町の一角には、女学生もそうハイカラなのが沢山いない。それに、市が谷見附のかなたには時雄の細君の里の家があるのだが、この付近はことに昔風の商家の娘が多い。で、少なくとも芳子の神戸仕込みのハイカラはあたりの人の目をそばだたしめた。時雄は姉の言葉として、妻から常に次のようなことを聞かされる。

「芳子さんにも困ったものですねと姉が今日も言っていましたよ、男の友達が来るのはいいけ